

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り 小文間



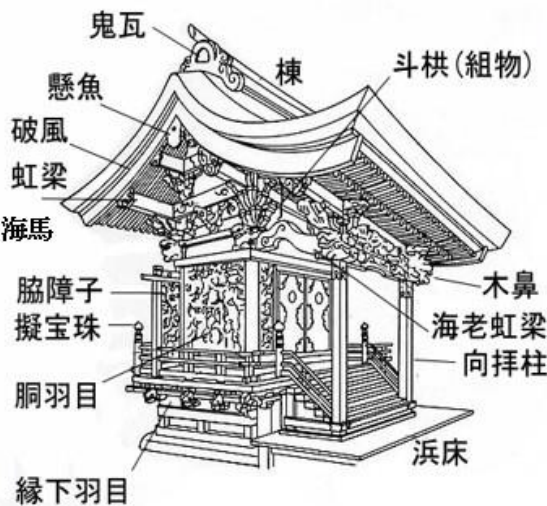
相馬二万石新田開発の
伊奈半十郎忠治像(川口市)



絹布の癸祥地
金色姫は鞆船(うっぱね)で、享和三年(1803)小貝浜に漂着現在の日立市富浦港。神栖蚕霊社所有

戸田井白山神社本殿の彫刻 後藤縫之助 明治23年(1890)65歳作

- 懸魚 (げぎよ)
- 破風 (はふ)
- 虹梁 (こうりょう)
- 左障子、玉依毘売
- 胴羽目左、菊慈童**
- 擬宝珠 (ぎぼし)
- 縁下羽目左、波に亀と海馬
- 斗拱 (とぎょう)
- 木鼻、獅子と莫
- 向拝柱左、昇龍
- 妻側左、火炎の龍



- 右障子、浦島太郎
- 胴羽目右、天狗と牛若丸**
- 縁下羽目右、蝦(がま)蛙
- 向拝柱右、降龍
- 妻側右、龍

- 胴羽目後、大蛇退治**
- 縁下羽目後、獅子と波に海馬



<http://88souma.net/>

伊奈半十郎忠治と相馬二万石

伊奈忠治、文禄元年(1592)～承応二年(1653)

江戸幕府が成立し、徳川家康は重臣の伊奈備前守忠次に、利根川の流れを内海(東京湾)から外海の銚子へ換える「利根川の東遷」を命じました。

忠治の父忠次は、此の大事業を次男の伊奈半十郎忠治に繋ぎ、伊奈家二代に渡り粗完成としました。

戦乱の世も終わり、徳川の世が安定期に入り始めた寛永年間(1624～1644)、関東郡代となった伊奈半十郎忠治は、洪水を防ぐための利根川の東遷とともに利根川支流の鬼怒川(栃木県日光市鬼怒沼)と小貝川(源は栃木県那須烏山市曲畑)に分離しました。

そして取手市小文間の戸田井付近の台地を切り開き、利根川と合流する小貝川人工河口と、水海道で小貝川に流れ込む鬼怒川泥地の河川分離で人工河口の流路を完成させ、小貝川は取手市と利根町の河口で、鬼怒川は守谷で利根川に合流させました。

小貝川は鬼怒川と切り離されることで川の流れが安定し、寛永7年(1630)には岡堰が設けられました。岡堰に貯められた水は用水に流れ、相馬二万石と呼ばれる広大な新田を潤すこととなります。

しかし、工事は現在のような機械はないので、多くの労力と様々な失敗を繰り返しながら行われ、勢いの強い水の流れを変えるためには、萱と竹を使った独特の工法である「伊奈流」が苦勞の末に編み出されました。昭和に入ってから、人々は堤防や堰の決壊時には、この伝統的な工法である「伊奈流」で危機を乗り切ってきた様です。

関東三大堰、(写真、昭和27年頃の岡堰)

取手市を流れる小貝川対岸の、つくばみらい市に福岡堰があり、桜の名所にもなっています。以前は山田沼堰と言いました。

此の堰の下流に岡堰が設けられ、更に下流の利根町に豊田堰があり、関東三大堰と云われています。

堰の役割は、用水路や排水路を開削して谷和原三万石(常磐自動車道谷和原インター)と、相馬二万石取手市、龍ヶ崎市、利根町を開発し、江戸の食糧源としたのです。

取手市毛有(けあり)、日清食品取手工場近隣の薬師堂は、伊奈忠治が眼病となったときに、岡堰用水組合の村々の農民が、伊奈忠治の病が治ることを祈って建立したと伝えられ、現在でも取手開発の功績者として厚い尊敬を集めています。

岡堰4本の用排水路

表郷用水路、桜ヶ丘で北浦川と相野谷川に分流

裏郷用水路、高須で消滅後桜ヶ丘で北浦川へ

西浦川、北浦川に合流

北浦川、桜ヶ丘で小貝川に合流

五箇用水路、北浦川支流に分流

用水ではないが相野谷川、下高井から城根で利根川に合流。相野谷川は取手市内だけを流れる一級河川で、ゆめみ野地区は暗渠(あんきよ)となっています。

伊奈家の忠治について

小貝川河口替えて新設された、道仙田(どうせんた)河岸から船積みされた、相馬二万石の農作物は、利根川を関宿迄上る船は、関宿の分水門から江戸川を下り行徳へ、新川、小名木運河で隅田川両国、日本橋市場へと運びました。

伊奈半十郎忠治は武蔵国小室藩主、伊奈忠次の次男半十郎は、定方を勤めていました。

しかし、父の没後、跡を継いでいた兄忠政も元和4年(1618)に34歳で若さで没してしまいました。忠政の嫡男忠勝はこの時8歳の幼少であったため、家督は忠勝が、関東代官職は忠治が継ぎました。

忠治は関東代官となる前から幕府に勘定方として出仕しており、武蔵国赤山(埼玉県川口市)に既に七千石で赤山城を拝領していたため、兄の配下だった代官の多くが忠治の家臣となりました。忠治は父の仕事を引き継いで関八州の治水工事、新田開発、河川改修を行い、荒川の西遷にも携わった。

江戸初期における利根川の東遷事業の多くが忠治の業績であり、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国、常陸国一帯の堤防工事など小規模の物件にも携わっています。

なお、この業績を称えて忠治を祀った伊奈神社が、桜の名所である福岡堰、つくばみらい市北山の北東、真瀬にあります。また、旧筑波郡伊奈村の村名は忠治に由来します。

父の忠次も、埼玉県北足立郡伊奈町の由来となっており、親子二代で地元人に親しまれた偉大な存在であると云える。なお、忠勝は元和4年に9歳で病没し小室藩は無嫡廃絶となるが、名跡(みょうせき)としての伊奈氏は忠政次男の忠隆

が継いでおり、忠治は傍系である。「関東郡代」という職名の正式な設置は寛政4年(1792)であり、当初の関東郡代は忠治からの自称とみなされています。

忠治の業績

元和年間(1615～1624) 吉見領開墾…武蔵国吉見領
寛永5年(1628) 中山道の移設による大宮宿の形成、

水川参道西側に街道を付け替えて宿や家を街道沿いに移転させ、現在に至る大宮の町の基を創る。

寛永6年(1629) 荒川瀬替え

武蔵国久下～川島(熊谷市～比企郡川島町)

寛永6年、見沼溜井、八丁堤

寛永6年～寛永7年(1630)、鬼怒川と小貝川の分流

寛永7年、新綾瀬川開削

武蔵国内匠新田～小菅(東京都足立区)

寛永12年(1635) 江戸川開削

下総国関宿～金杉(野田市～埼玉県松伏町)

佐伯渠(さえききよ、五霞村小手指)通水完成

正保元年(1644) 北河原用水、武蔵国北河原(行田市)

一部小説では玉川上水工事の二度の失敗の責任を取り切腹したと云われているが、切腹はフィクションで、史実は承応二年(1651)六月、玉川兄弟と玉川上水の現場で打合せ中に心臓発作で亡くなりました。

JR高崎線鴻巣駅徒歩10分、古刹勝願寺境内に

忠次と忠治の陵墓があります

山王出身の有名な俳人ホトトギス4S素十

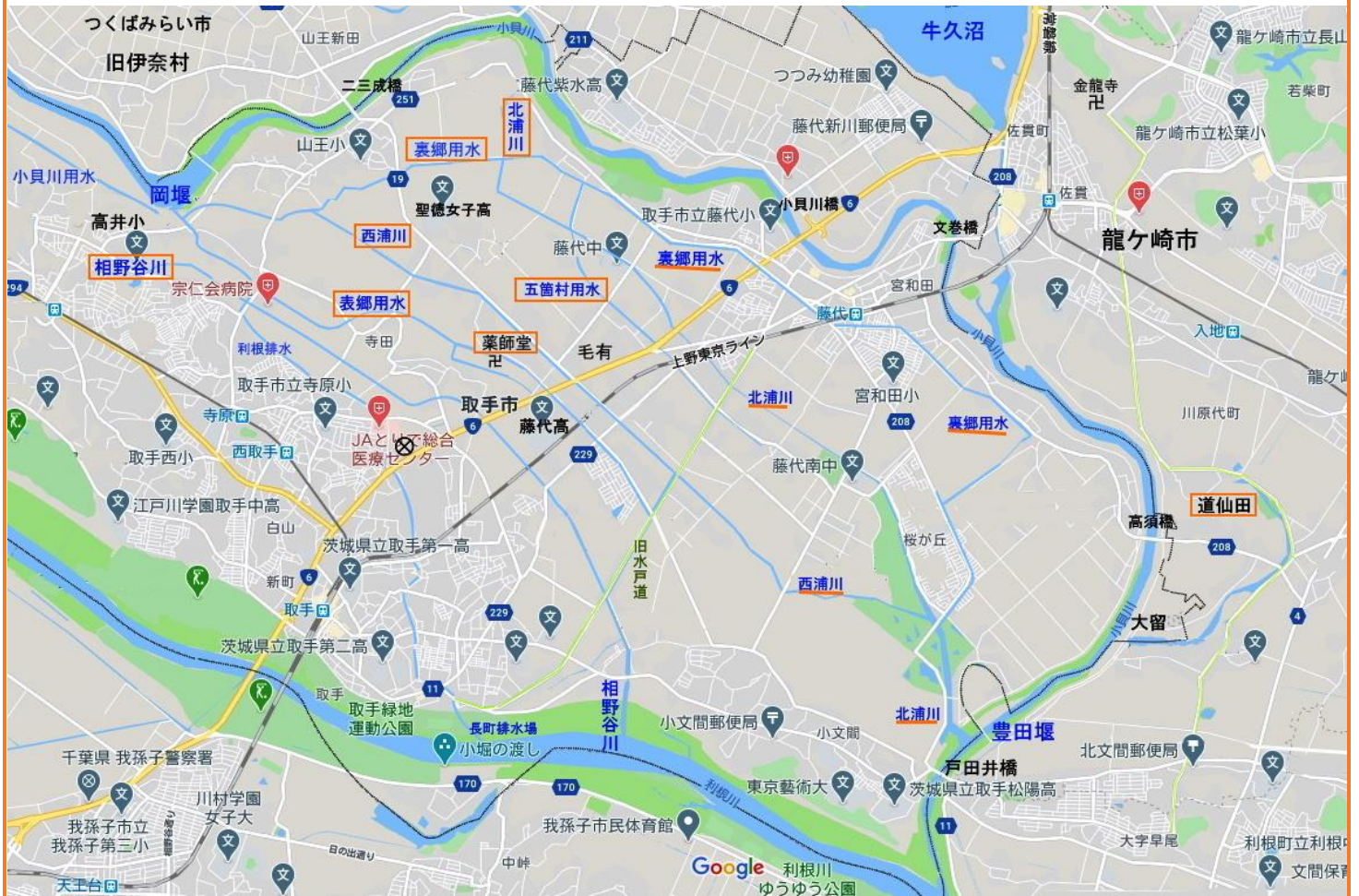
取手市山王と寺田の村では、昔から水争い続き仲が悪かったといえます。山王出身の「ホトトギス4S」※の一人で人気俳人 高野素十の句です。

水喧嘩 徳川の遠に さかのぼる

※虚子に師事、水原秋桜子、山口誓子、阿波野青畝(せいほ)



取手地区内用水地図



新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

相馬二万石の里山、小文間(おもんま)を巡る

集合場所：〒常磐線取手駅東口前、大利根交通バス
で平石へ移動、乗車時現金310円要。

【地名】小文間、

茨城県取手市東南部に位置する丘陵地で、北に筑波山、桜が丘団地、東は小貝川、龍ヶ崎市街、利根町布川、南は利根川で我孫子市江蔵地、湖北、中峠、西は取手市街井野に隣接している、利根川と小貝川に挟まれた台地です、河岸には草原が多く取手市民の運動施設や老人施設があり、田園ののどかな景色に包まれた静かな里山風景に満たされた台地です。
「取手町郷土史資料集」によれば古くは「紋間」と云う集落から一部地域が独立して「小紋間」と云われ地名とされた様です。

また、江戸初期の寛永19年(1642)から江戸幕府、その後、下総佐倉藩領として元禄11年(1666)から天領となったと考えられるが、延享三年(1746)あたりから旗本知行地の大名領相給となり、支配は複雑化していました。文政十年(1827)の相馬郡地頭并村高調帳によれば旗本高木善重知行地三九四石余、旗本村上主殿知行地三九二石余、天領一千一六石余に分れ、ほかに天領の流作場(湖沼や河川の沿岸にある水が一面にかかっているような場所)などがあつた。

相馬二万石と伊奈半十郎忠治。

伊奈忠次(いなただつぐ)天文19年(1550)〜慶長15年6月13日(1610/8/1)は、江戸時代の代官でした。

徳川家康より「利根川の東遷」及び「荒川の西遷」という大荒川の分離工事を命じられていました。

荒川の西遷は、寛永6年(1629)、忠次の次男である伊奈半十郎忠治(文禄元年(1592)〜承応2年6月27日(1653.7.2))によって、当時の入間川や荒川、墨田川と、忠治は父や兄の仕事を引き継いで関八州の治水工事、新田開発、河川改修や玉川上水(玉川兄弟により完成)の開削などに携わっています。

また、父忠次から受け継いだ、利根川の東遷事業の多くは忠治の業績であり、江戸川や利根川、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国、常陸国一帯の用水工事などによる新田開発でこれ等の地域は潤いました。この業績を称えて忠治を祀った伊奈神社が、福岡堰の「北山さくら公園」小貝川土手脇にあります。

また、旧筑波郡伊奈町の町名は忠治に由来します。父の忠次も埼玉県北足立郡伊奈町の町名の由来となっており、親子二代で地名に名を残しています。小貝川に設けられた、関東三大堰、上流から福岡堰、岡堰、利根川合流近くの豊田堰より灌漑用水を掘り新田が開発され、谷和原三万石と相馬二万石が誕生し、江戸の食糧源となりました。

埼玉県伊奈町大字小室字丸山に伊奈屋敷跡があり、諸国からの水運を計り、江戸の繁栄をもたらした忠次は、武士や町民たちはもとより、農民に炭焼き、養蚕、製塩などをすすめ、桑、麻、楮(こうぞ)などの栽培方法を伝えて広めたため、農民たちからも神仏のように敬われていたといえます。

慶長6年、父の忠次は常陸紬の産地である結城の里に於いて、染色と縞の織法を技術導入し「紬」の

改良に努め、結城紬の評価は高まり全国的に知られるようになりました。茨城県立歴史館「結城紬」

利根川の東遷と衣川改修、

利根川の付け替えにかかわる一連の河川改修。

徳川家康は江戸を水害の難から遠ざけるために、東京湾に流れ込む大荒川の荒川の付け替えと利根川の東遷の大工事で、小貝川や鬼怒川そして渡良瀬川の大河川と、これらの河川の支流にまで及ぶ河川や湖沼の改築を関東郡代の伊奈忠次に任命しました。

霞ヶ浦が海であった頃の利根川は古我、現古河市近辺の沼地を水源とした常陸川と呼ばれた小河川で布施の蘭沼(いぬま)を経て文間台地東部で文巻川(ふみまきがわ)に合流、香取灘の一角であった手賀海に流れていました。衣川は鬼怒川と同じ旧呼名。

大河川となった利根川は土砂堆積により海を埋立て干潟となり陸地化され現在にも及びます。

利根川の付け替えの工事は、江戸時代初期の文禄3年(1594)に行われた「会の川」当時の利根川流路のひとつで現在埼玉県の行田市と羽生市の境界付近の締め切り工事から承応3年(1654)の赤堀川通水の成功、そして銚子の鹿島灘(太平洋)まで、各所での変遷工事は長期に渡る難工事でした。

工事中に起きた浅間山元禄噴火による火山灰と火山岩石は利根川の川底上昇を招き、河川の氾濫を招きました。氾濫回避のための浚渫土対策や明治18年の足尾銅山鉍毒事件による渡良瀬川と利根川下流域公害問題などとともに水害防止維持の為の保守工事は永遠に続く事となり河川の陸地化は現在も続いて

います。

しかし反面、この大工事に於いて下総国相馬と谷和原に五万石の農地と水田を後世に残した、小貝川下流域には、うなぎや遡上する利根鮭による漁獵とともに、新田は下総国相馬郡に潤いをもたらした結果、相馬二万石と現在でも呼ばれ潤っています。

小文間の台地から壮大な相馬二万石が見られる。その田園の様子は、常磐高速道やつくばTXなどの車窓からも見ることが出来、更に岡堰、小文間の台地まで続きます。

四季の稲の色は折々変化して鳥類の群れが飛ぶ姿も眺めることが出来ます。「利根川下流探訪ガイド、河口く佐原く取手印旛沼牛久沼周辺」建設省利根川下流工事事務所の非売本より。

小貝川下流域は文巻川(ふみまきがわ)と言われた。

小貝川は、栃木県那須烏山市曲畑(そりはた)の小貝ヶ池を水源としています、途中下館から五行川、常総市で鬼怒川が合流していましたが、利根川の東遷で分離し、鬼怒川河口は水海道市へ移されました。

それまでの衣川(鬼怒川)は、小貝川に合流し石下辺りの情景は、流れる川面ではなく、沼が点在する泥地でした。従って衣川を大型船で通行することが出来なかった様でした。

利根川の東遷によって衣川の分離が行われてから鬼怒川は水海道、小貝川は谷和原へと分離され、鬼怒川は水海道、小貝川は道仙田(どうせんだ)に、それぞれ河岸場が出来ました。

文間台地の南側河口に流出していた文巻川の川名

はさらに古くからあったようです、現在の横利根川(龍ヶ崎寄り)を流れ、利根川合流地点より更に佐原寄りに河口があったようです。

小貝川河口の開削後も昭和年代までは「文巻川」と呼ばれていました。藤代の旧国道六号の小貝川橋梁に「文巻橋」として名残を留めています。

小貝川の源は小貝が池という小さな池。

小貝が池は二枚貝の形をした小さな池ですが水量が安定した湧水池で名前の発祥のようです。

「小貝川」の川名は、栃木県小貝川河川管理局の案内板によると「古く飛鳥時代より河川域で養蚕が行われていて、桑の木が沢山植えられていました。

その様子から、子飼川と言われ、絹糸の原料となる、繭(まゆ)の子供の蚕(かいこ)を飼うから、つけられた名」と記念碑に書かれて居ます。なんと美しい河川名でしょう。

鬼怒川と同じく関東には「絹」に絡む地名が多い様です。

「小貝川」河川名には他にも諸説があります。

平塚(ひらつか) (ひらつか らいちよう)

明治19年(1886)2月10日〜1971年5月24日)小貝川の零キロポスト附近に疎開していました。

「女は太陽」の話です。

私立取手松陽高校正門前の土手上の道を右へ進むと民家が2〜3件あり、民家の手前土手上左側に、小貝川の起点石柱が草むらに隠れています。

この辺りには、出口王仁三郎(おにぎぶろう、明治4年(1871)〜昭和23年)、という怪しげな宗教家に入信していた頃の平塚らいてう女史が六年ぐらい住んでいた」といいます。

明治時代末からの女性解放運動・婦人運動の女指導者で後年には平和運動にも関わりました。

名表記は一定せず、漢字で雷鳥と書く場合や、塩原事件で有名になった為に、本名の平塚明(ひらつか)は色々平塚明子で評論の俎上(そじょう)に上がることもありました。

取手小文間には昭和17年〜22年迄の間、疎開していたようです。

「元始、女性は太陽であった」は有名な記述です。

今では死語に近い、相手の女性より年下の恋人を「つばめ」と呼ぶのは、30歳代頃同棲していた画家の奥村博史が、らいてうと別れることを決意した際の、らいてうの手紙の一節に「静かな水鳥たちが仲良く遊んでいるところへ一羽のツバメが飛んできて平和を乱してしまった。

若いツバメは池の平和のために飛び去っていく」をらいてうが『青鞥せいとう』誌上で発表し、一種の流行語になったことに由来します。

戸田井の渡し場跡

戸田井の渡し場跡 お遍路さん達は戸田井の渡しや後の戸田井橋を渡らず「お遍路の渡し」で千葉県側の布佐に渡った、という変則的なお遍路コースは、現在でもその真意をつかみきれない経緯を残しています。その訳。

取手駅前長禅寺にある相馬霊場第五番は嫁ぎ先に拒否されたから。

あえて、利根町の布川に行かなかった理由は、布川の徳満寺が相馬霊場が出来てのちに布川霊場八ヶ所所の祈願寺になったこと等も含めて、既に受け入れ難い状況下にあったように思われます。

更に、全国各地に点在する新四国や准四国の大師霊場や観音霊場では、隣接する同一地域にお互いの霊場札所が重複しない様に配慮して、お互いに干渉しないという、暗黙の了解が約束されていました。

取手市史民俗編に、相馬霊場のお遍路さんは、戸田井の伊勢屋の接待で店前から渡しに乗って食べる「煮し目」の御飯が楽しみであった様子が記されています。渡し場は今も残されています。

渡し場前の土手下の民家の庭先には、文久二年(1862)六月、地元遊女処の遊郭による、奇進の常夜灯が現存しています。

打始

第四十八番、石井山安養寺(廃寺)跡地の不動堂

ご本尊、不動明王、

移し寺、愛媛の清滝山(せいりゅうざん)西林寺

御詠歌、弥陀仏の世界をたずねゆきたくば

西の林の寺にまいれよ

もとはここに石井山安養寺と言う寺がありました。が、明治の始に石井清長住職が帰農したため廃寺となりました。

県道側に境内があったようですが、昔の墓地での辺り一帯の西方貝塚中心に二千躰くらいの白骨が

出たといわれています。

大師堂は昭和12年の再建でゴマ石造り、

左に堂跡、右に不動明王堂があります。

後記・別頁に記載の「五条街」は、この辺りの利根川河川敷にあったものと考えられています。

第五十四番、高龍山福寿院大聖寺(空寺)、

真言宗智山派に属し浅草の龍福院の末寺でした。

俗称、麻疹(はしか)不動。

ご本尊、不動明王座像(像高3m)、

移し寺、愛媛県近身山(ちかみさん)延命寺

御詠歌、くもりなきかがみのえんとながむれば

のこさずかげをうつすものかな

小文間中村家一族の菩提寺

寛永七年(1630)、岡堰創設に同)中村家一族の守り

本尊として尊栄によって創建され、貞享元年(1684)

照円によって再建されました。

元は、旧水戸街道沿いの不動橋近くの田圃の中にありましたが、寛永七年に岡堰が出来て水路を通した時に低地となった為水害の難逃れより、この地に移転しました。

ご本尊の不動明王は慈覚大師の作と言われ、像高

一丈(3m)、眼光は爛爛としております。

頭部の中には、一刀三礼で精魂込めて創られた不動明王像が納まっているそうです。

又腹中には秘文が入っており「これを不動明王の

誓約速やかにして、その御利益余尊、釈迦涅槃後の

「さとり」に超え、一切の魔軍を焼き尽くして麻疹の難を除く」とあり、麻疹不動として絶大な崇敬を

集め、かつては土浦や江戸等の遠方からの参詣者が絶えなかったようです。

明治時代まであった本堂は現存せず、不動堂と大師堂が残されています。大師堂の屋根は銅板葺きです。

蠶影山(こかげさん)蠶影社石碑、蠶霊供養塔、蚕影神社の本社は、つくば市神郡にある絹の発祥地で、成務天皇が734年農蚕奨励で国造りを行った所です。

他に、中村熊次郎寿蔵碑等、更に土砂加持記念碑のほか、四国八十八ヶ所、西国秩父、坂東の観音霊場などを周った時に講または個人で立てた石碑が沢山祀られています。

明治35年夏、中村熊次郎翁は不動尊の腹中から秘文を発見した為、堂前の石碑にその秘文が記されています。

寛永七年、法印権大僧都尊栄という高德僧が天下安泰と国土豊饒(ほうじょう)五穀豊穰(ごこくほうじょう)の聖で全国行脚の途、相模、上州、秩父に不動明王を祀ったと云われています。

寛永七年(1630) 九月八日府川正学坊祐一之筆

第十九番、深雪山明星院、真言宗豊山派。

移し寺、徳島県橋池山立江寺(きょうちざんたつえじ)、

ご本尊、延命地藏菩薩

御詠歌、いつかさて西の住居のわが立江

弘誓の舟にのりていたらむ

ご詠歌の意味、わが立江とは、寺名にたとえた「館」と云う事。

人には命有り、いつまでも生きて居られるものでも無い、命が来て目出度く此の娑婆を出立し、有り難い佛様のお船に乗って西方の蜜巖浄土、大日如来の浄土の我が館へいつかは赴くであろう。

明星院（みょうじょういん）とお大師様

明星院境内の立派な大師堂、その後には六角の開山堂があり、その周りには十六羅漢の小さな像が並び印度人の顔をした仏弟子を見ることが出来ます。

また境内にはヤマボウシ、ハナイカダなどの珍しい樹木があり手入れも行届いていて癒されます。

取手七福神の一つで恵比寿を祀る。

明星院縁起（聞取）。

初代井上慈光住職について、農業をやっていた父光運が晩年に近い頃八十八ヶ所巡りに刺激されて僧職になりました。

それまでは県道傍に三階建ての宿坊を営み「明星院八十八ヶ所宿坊」と名付け、相馬霊場の八十八ヶ所巡りの人々を宿泊させていたそうです。

この頃の小文間は農作物の収穫が少なく、田も低地の遠いところにあり、道具を運ぶのが重労働であったようで、貧困村故、生まれてくる子供も虚弱体質の子が多かったそうです。

昭和44年、先代井上慈光僧により長谷寺末寺明星院として再構建立。

ひ弱であった先代（初代）は、四国八十八ヶ所巡りをして健康を回復、発心して僧職を志し、徳島県小松島市の関所寺、一国に一寺ずつある寺で、邪悪な心を持った者はここから先には進めないと云われ

る立江寺（たつえじ）より、鎌倉時代の、像高30センチ程の杉の木像を持仏とし、下総城主（下妻市宗道）の多賀谷氏家臣源松右衛門頼久の守り本尊として勧請奉安されました。

京都の醍醐寺や奈良の長谷寺で修験道の修行、高山での修行ののち、小文間に戻り明星院を建立し、徐々に壇家を増やしたそうです。

この時、六角堂永代供養塔を建立するに至り、厄除け大師として祀るとともに「取手大師霊園」を開園されました。

また、西方公民館の設立では、小文間の台組と谷津組の折合困難でなかなか出来なかったところを明星院の御尽力により建築することが出来たと云います。

第十九番札所は、娘十九の厄除け大師といわれ、女房の健康は三十三番大師へ参り、亭主は四十二番大師へ月参りをしたとか「娘おしや十八歳、早十九歳。廿歳までの親心」と云われ、娘の良縁の願掛け呪文であり、廿一番に詣でて結縁を願ったようでした。

四国の移し立江寺について、四国八十八ヶ所の根本道場と言われる「立江寺」は、境内の伽藍が見所ですが宿坊としても知られたお寺です。

精進料理を頂いたり説法を聴いたり、私事です。が泊して心に残るお寺でした。

立江寺のく四国の総関所と呼ばれる由縁についてく

「肉付鐘の緒」と云われる「芸妓お京と鍛冶屋長蔵」の夫殺害物語話があります。

石州浜田（島根県） 城下通町三丁目の桜井屋銀兵

衛にお京という娘おり、16歳の時大阪新町へ芸妓に売られ勤めるうち、要助という者と契りそめ、22歳の時、大阪を脱走し生国浜田へ立ち帰り親に頼みて要助と夫婦になりしが、お京心様最も悪しく馴れるにつれ我儘増長し、鍛冶屋長蔵という密夫をつくり、之れを夫要助に嗅ぎ付けられ、二人とも散々に打ち擲（てき）殴（ぶ）られれば、邪見のお京は長蔵を手引きして、夫要助を打ち殺し、讃岐丸亀へ渡り自害せんとするも気おくれし、後生のため四国巡拝をなさんものと当山まで来たり。

地藏尊を伏し拝まんとするや忽ちお京の黒髪逆立ち鐘の緒に巻きあげられ苦痛の体に長蔵狼狽し、院主へ救いを請いければ、院主は罪の次第を問いただし、お京懺悔（ざんげ）すれば、不思議にも、お京の黒髪もろとも肉はぎて鐘の緒に残り辛じて命はたすかりける。

生国にて自害の時おくれ、当山まで来りて大罪をこうむるは天の然らしむところと兩人改悛（かいしゅん）の心を起し発心出家して、当村田中山、当山より北へ五百メートル、現在のお京塚というところに庵をむすび一心に地藏尊を念じ生涯を終われり、肉付鐘の緒を当山の堂に納め置くは享和三年（1803）の春のことなり。立江寺縁起より

明星院境内の首なし大師像

明星院は戦後の昭和45年に新たに出来たお寺です。新四国相馬霊場第19番があり札所の方が寺院よりも古いことになります。

しかし、よく見ると、明星院の境内と墓地には、

露天の大師石仏が数十体程境内に散在しています。

石仏の大きさは全て同じような大きさで像高40〜50cm、半分ほどは首が無くなっています。

全国の大師仏は、台座に地名が記されている場合が多いのですが、明星院のこれらの石仏には文字の痕跡は見えません。

よく見ると一体ずつ佛顔相が違い、削り後もノミを使っているので一体ずつ手で彫ったもので古さを感じます。

これ等の仏像のことを尋ねたりして、調べてみました。幸いにも「下総のへんろ道」に記載されている「石下新四国霊場」と「厳島神社新四国霊場」の資料が存在していたので現状を知ることができました。

説明中に次の項目が疑問として発生しました、
一、仏像が全て同じ造りであるので、彫刻師や年代が一元と考えられるため、鬼怒川の決壊で被害をうけた、石下の厳島神社にあったものではないか。
二、厳島神社の大師仏が開創者入江与五郎と共に取手に移した先のお寺が明星院ですが、福永寺もまた、院号が明星院であること。しかし、福永寺には、首無し大師像の痕跡すら無く、また一般では通常寺名が使われる筈なので、明星院福永寺ではないと思います。
三、「一部を新石下に祀りなおした」は何時頃の話なのか。石下大師のある西福寺ご住職からの御返事は、次のようでした。

『石下大師の復興と共に、檀家各位が持寄った大師像であって、どのような過程で祀られているかは、

個人に訪ねないと分らない』との事、だが復興時には新たに造られた石仏や昔からあったような古いものまで、いろいろあるので、明星院にお世話になった大師像もあるのではないのでしょうか。

以上、切っ掛けとなった「下総のへんろ道」より。
~~~~~

石下新四国霊場（石下大師） 壽廣山観音院西福寺  
寛永9年(1632)に了学上人の隠居所として建立された浄土宗の寺院でした。

### 壽廣山観音院西福寺について

寺宝としては、ご本尊の弥陀三尊像、  
阿弥陀如来を中尊として左脇侍観音菩薩と

右脇侍勢至菩薩、

両大師像は、浄土宗なので高祖善導大師と元祖法然大師、聖観世音菩薩像、真言八祖掛軸(狩野深幽作)、平将門供養碑(北条時頼命)などがあり大寺院です。

浄土宗の寺院としては珍しく、境内に四国八十八ヶ所の霊場が祀られています。

これは、天明2年(1812)の大飢饉の際、開基大檀那の小口孫兵衛氏の子孫が、救済事業として私財を投げ打って、飢餓に苦しむ農民らに築かせたものであり、池を掘り山を築き、八十八ヶ所のお堂が祀られているものです。

現在でも毎月21日に縁日が開かれ近隣の参詣者で賑わっており、当地に居ながらにして四国八十八ヶ所霊場のお遍路参りが出来る訳であります。

石毛大師霊場の創建時に於いては、池を掘った土をもって小山を築かせ、土一架につき米三合を与え

るとしたが、人々は空腹のために一架の土をも担ぎあげることができず、孫兵衛は、茶屋「五家屋」へ頼み、美女の仲居を構築中の小山に立たせ、土を担ぎあげた者には彼女の手を握らせることとして、彼等の生活費の支出を企てたと伝えられていて面白いといつては失礼ですが。このような色仕掛けを含むごとき艱難辛苦の末に完成した築山に弘法大師八十八ヶ所安置の篤志者を募ってできたのがこの新四国で、通称「石下大師」と呼ばれ、名主小口孫兵衛の貧民救済事業に係わる由縁を開創の歴史としています。

築いた山の木々の間にくく、肩を寄せ合うように安置されている堂宇および大師石像の数は百二十四、近くの平内に社地を持つ厳島神社に祀られていた石像もこの中に含まれているというが、それが何体で、どの座像であるか、今日では解明できそうもありません。

それらの堂宇等は守護する人々によって改修あるいは改築されながら今日においても巡拝が続けられているようです。

### 厳島神社新四国霊場(石下市)

厳島神社(茨城県石下町平内公民館隣)に安置されていた大師座像です。現在全く無い。

いつの時代であるか定かではないが、病弱の二人の娘を持つ入江与五郎が最後の手段として弘法大師に助力を願う決心をし、大師座像を刻ませ日夜を分かたず信心を尽くしたところ日毎に体力を取戻した。この様子を見ていた村人らは誰いうとなく大師像





## 第六十二番 海中山明星院福永寺、真言宗豊山派。

ご本尊、不動明王。創立、大永7年(1527) 移し寺、愛媛県密教山吉祥寺、

御詠歌、身の中の悪しき悲報をうちすてて

みな吉祥をのぞみいのれよ

海中山福永寺の毘沙門天像

境内には本堂、鐘楼、毘沙門堂と大師堂等がある。

天長元年(828)の夜明け方、小紋たなびく波間に燦然と輝く毘沙門天が湧出したといわれています。

毘沙門天は運慶二十五代目の弟子で法橋の位にあった京都堀川の福田康政嘉兵衛兼永の作で像高が八尺あります。

胎内に「閻浮檀金(えんぶだごん)、金と白金の合金製の本尊を秘蔵していました。

古代インドの想像上の金の名。閻浮は樹木の名。

檀、提(だい)は河の義。閻浮樹林を流れる河から採取される金を云い、黄金の中で最勝であり、色は赤黄色で紫焰(しえん)、紫色の炎(えん)をおびるという。

また、閻浮提とは仏教の世界観で人間世界のこと。

この世、現世を云い、場所はインドになります。

取手七福神の一つです。

かつての毘沙門堂は、左甚五郎家による造営といわれていたのですが、老朽化により建替えられました。

なお参考に、日本三大毘沙門は、京都の鞍馬山、大和の信貴山、野州の大岩山の三毘沙門天像を言うそうです。

大師堂は聖徳大師堂と並んで建っています。

元は毘沙門堂前方の大樹の下にありましたが、台

風により大樹の枝が倒れ、大師堂の屋根が倒壊したために平成十年新築改装されました。

本堂内陣には、一時テレビなどで話題となりました

たが、この寺の境内のケヤキの木を切り「板」にしたところ、木目に先代の住職夫婦の顔が浮かびあがってきたという、人面板があります。

更に、生きながら成仏したという大僧都法印定伝の石棺と鐘楼が毘沙門堂の前に祀られています。

## 中妻貝塚

縄文時代後期に於ける巨大な馬蹄形貝塚であり厚さ一メートルもの貝層が直径二百メートルの円形に広がり、骨角器、石器、製塩土器が出土しました。

足元に貝殻が白く散乱して貝塚の上に立っていると、台地の近くまで海が追っていたということを実感できます。墓地の中の小山も貝殻の山です。

墓地の墓の周りも貝殻が見られるため、かなり広い範囲で大規模な古代の部落があったのでしょう。

## 第十五番 弥陀堂、ぼっくり榎大師

移し寺、徳島県薬王山国分寺。

法養山とする処もあるが、寛保元年に時の藩主の命に依って再興され「薬王山」と名を改めています。【注】遍路最新版は法養山として案内されています。

れています。

ご本尊、阿弥陀如来。

御詠歌、薄く濃くわけわけ色を染めぬれば

流転生死の秋のみみじ葉

## ぼっくり榎大師

榎の大木の下に南会館集会所があり、ぼっくり榎大師と赤い大師堂と弥陀堂があります。

大師堂は昭和55年に修復で碑が残されています。「ぼっくりさん」は、特に高齢の人達に「人生の締め括りは、他人に迷惑や心配を掛けず「コロ」と逝きたいという願いから人気があります。

福島県の「会津コロリ三観音」は、その代表的な存在で全国から参拝に訪れているそうです。

取手には、小文間の他に、野々井の「ぼっくり観音」、藤代の「ぼっくり地蔵」等があります。

## 小文間城主一色宮内(いっしきくない)

大師堂の裏側に「小文間城主一色宮内政良の墓」と読める木柱と傍らに墓石がありました。

墓石はありませんが、現在は木柱はありません。

取手市内を流れる相野谷川河口近くに、大利根交通バスの「城根」バス停があります、相野谷川の取手寄り一帯は昔、雁金山という地名があったそうですが、今は住宅地となり、地名も城根の一部になっています。

室町時代の末期永録年間に「雁金山の合戦」が行われたところで、この合戦は当時小文間の城主であった一色宮内が、取手の大鹿城を闇討ちして攻め落とし、城主の大鹿太郎左衛門時平を倒した取手(砦)名の由来となっています。

一色宮内は城に帰りつく前に、我孫子柴崎の城主荒木三河守とその一派の連合と稲の大鹿時平の義弟高井十郎の反撃に会い、雁金山で合戦し、小文間城

を落とされ、宮内始め城内の者三十有余人は「首切り地蔵」の場所で処刑されたと云われています。

宮内はこの大師堂の後に埋葬されたと言う伝承があるが、千葉県側に落ちて生延びたとも言われています。いずれにしても城は滅びましたが、小文間城は東谷寺に行く途中の市営住宅南団地の前方傾斜地で梨畑になっているところにあつたそうです。

城跡の痕跡は東谷寺の西斜面にあつた様です。

## 第六十六番 明香山観音院東谷寺、真言宗豊山派。

移し寺、愛媛県巨龍山雲辺寺

(きよこうざん うんぺんじ)、

ご本尊、大日如来

御詠歌、はるばると雲のほとりの寺にきて

月日をいまはふもとにぞ見る

東谷寺(とうこくじ)は、室町時代末の小文間城主一色宮内政良、永禄四年(1563)没の祈願寺であり鬼門除けとして創建されました。

観音堂には一色氏の守護神であつた如意輪観世音菩薩が安置されています。

小文間に現存する寺院では古くからの歴史がある。取手七福神の弁財天が境内に祀られています。

茶道の祀り寺であり、本殿奥の庫裏(くり)、境内にある僧侶の私宅)には茶室が設けられています。相馬霊場での寺院では珍しいお寺です。

茶室は庫裏に2室あり、本堂にも別室があり、このように寺院内に多くの茶室を設けている東谷寺に、茶道への関心を抱かぬ訳にはなりません。

事実、地元の茶道師匠を問わず、茶道界限では有

名な東谷寺の様です。

## 四国の移し雲辺寺について

曹洞宗雲辺寺は「お遍路ころがし」と言われる、横峰寺に次ぐ急勾配の登山路が2時間も続く難所でした。寺からは、霞がかかり雲の中に浮かんでいるように感じられる時もあります。

天正の頃、土佐の長宗我部元親(ちようそかべもとちか)が登山し、眼下の三国の山河を望み「四国併呑(いどん)の志を抱き、当時四十八代住職俊崇坊(しゅんそうぼう)に話しました。

俊崇坊は元親に「あなたの器は土佐一国の主だ、それが四国平定の野望を抱くとは、茶釜で水桶のふたをしようとするのと同じだ。いま兵を引いて土佐へ帰り、領民を愛するがよい」と意見しました。

元親は家臣の谷忠澄に相談し「仏法のこととは任職、兵法のことは武士」と意見を非難したそうです。

元親は後に、四国の三国を支配し雲辺寺も焼き尽くしたと伝う。だが秀吉に大敗し四国併呑はならず。

## 宗四郎坂、

宗四郎坂の道標の左の高台に斎藤杏庵翁(きよあんおきな)碑があります。

斎藤家は美濃国(岐阜県南部)の出身で、同地の土岐家とも繋がっており、更には徳川三代將軍家光の乳母春日局、即ち斎藤お福とは縁戚になっている。春日局は、明智光秀の将齋藤利三の娘で、利三が本能寺の変後、秀吉に敗れて処刑された後、高札に応じて家光の乳母になった事は歴史の示す所です。

よく郷土史家は小文間の斎藤家が「国盗物語」(司

馬遼太郎作)の斎藤道三の子孫のように論じているが、近年の調査では直接血の繋がりは無い。

道三は流れ者の様で、宗四郎家は元々美濃の名家に属する家柄でした。

春日局が家光の乳母となって権勢を得る迄は、宗四郎家は美濃に逼塞(ひっそく)していたものと思われま

親子争いの揚句、織田信長によって攻め取られた孫の竜興は、天正元年(1573)越前刀根坂の戦いで戦死、歴史から消えたが、ここに竜興の弟で、斎藤新五郎長竜と言う者がおり、信長はこの者に跡を継がせ、加治田城(岐阜県)を与え、先祖の祭祀を行わせている。が、長竜も本能寺の変で、信長の長子信忠に従い二条城で、明智勢に攻められ戦死している。

この事は小文間斎藤宗四郎遺跡とは直接関係はないが、一応参考迄に記しておきます。

徳川家も三代將軍家光の代ともなると、川の封禄は定まつており、いかに宗四郎家が春日局ゆかりの家であつても易々と領地を与えられるものではなく、春日局の目利きで、関東の未開地である小文間から神の浦一帯の湿地帯を賜り、代官の伊奈忠治と協力して、開拓に従事したと思われる。

開拓完成後は略一万石に上ると言われた。よつて国元から何人かの従者を連れて小文間に移住し、小文間村の永代名主に就いて、宗四郎坂下の左側に壮大な邸を構えたようです。

小文間における斎藤姓を名乗る家は、概ね宗四郎家の流れを汲む家系であり、この外加藤氏なども一緒に移住して来た所でした。



齋藤氏の初代は喜右衛門を名乗っていたが、以降代々宗四郎を名乗るようになりました、元々武士ではあったが小文間移住後帰農しています。

齋藤家は代々宗四郎を名乗りましたが、江戸湯島聖堂の昌平坂学問所昌平黌(しょうへいこう)の教授をしていた叔父の芳野金陵(よしのきんりょう)千葉県柏市松ヶ崎出身儒学者に師事し漢学と医学を修めた杏庵は育英の重要なことを悟り、勤めていた秋田藩を辞し、幕末の文久元年(1862)邸内に瓦葺二階建の校舎二棟を建て、齋藤家に寄寓していた丹波篠山の浪人森民部を同志として塾を開きました。

齋藤塾または如春塾といいました。

杏庵の死後門弟によつて建てられた顕彰碑です。

杏庵の長女、鴻(こう)は父にみっちり学問を仕込まれたのですが、湖北村古戸の旧家阿曾家に嫁いだところ、その教養故にうとまれ離縁されたのです。その後、鴻は人との交流を断ちひっそりと一生を過ごしたと言われています。

### 神出しの渡し

宗四郎坂を利根川の川原まで行ったところに「神出し(かみだし)の渡し」がありました。

取手の利根川には戸田井の布佐の渡し、戸頭の七里ヶ渡し、野々井の野の渡し、小堀の中峠の渡し、取手の小堀の渡し、などの渡船場がありました。

神出しの渡しは不定期船のため船頭を呼ぶと葦原から舟を出してくれたそうで、利根川対岸の我孫子市古戸の現我孫子市運動公園へ渡していました。

取手市吉田の平本家所蔵の絵図面道案内に次のよ

うな記載があります。

「十六番札所カラ川口(現在の戸田井)ハタシ、イそふし(江蔵地)カラ五十八番札所へ」と、相馬霊場お遍路の順路としていた古文書が保管されています。

なお、神を出すという渡し名は、神の渡し場の意味で「出し」とは船着き場です、戸や津と同意。

### 首切地蔵

元小文間小学校正門近くに地蔵堂があり「首切り地蔵」が祀られています。

地蔵建立時は宗四郎坂の中腹にあったと云われています。現在、首欠け地蔵が祀られ齋藤家の墓地です。

一色一族の刑場の跡といわれ「化け地蔵」と恐れられたため、齋藤宗四郎が地蔵の首を切り落とした際に地蔵の首から血が吹き出したといわれ、東谷寺の住職に拝んでもらい沈静した後、一色家の鬼門にあたる現在の場所へ堂を造り移した、といわれています。

現在、首が継ぎ足されていますが面容が普通のお地蔵さんとは違い、後に首を着け足したようです。

対面の元小文間小学校の正門脇に中村熊次郎の顕彰碑があります。郷土の農業に貢献した偉人です。

### 第七十二番、大日坂の大日堂、

移し寺、香川県我拝師山曼荼羅寺

(がはいしざんまんだらじ)、

ご本尊、大日如来。

御詠歌、わずかにも曼荼羅拜む人はただ

ふたたびみたびかえらざらまし

昔は小文間の中心地であった大日坂 三堂並びの中央が大師堂で不動堂、大日堂の他、青面金剛を含めて百八塔ある「百庚申」があります。

もとは新田の公会堂附近にあったものですが、盗難と分散を防ぐため、ここに集められたそうです。

参道取っ付きの青面金剛像は庚申信仰の本尊で、顔の青い金剛童子は、病魔や災難を除くといわれ、手に持つ金剛杵は煩惱を打ち破り菩提心を表す法具でもあります、享保12年(1727)建立。

大日坂の向かい側には春日神社があり、神社は元禄15年(1708)の創建で、天照大神を天岩戸から外に出した神、天児屋根命(あまつこやねのみこと)を祭神としています。

大日坂にはかつて小文間村役場や学校が存在していた時期もあり、江戸時代を通じて村の中心的役割を担っていたのですが、明治35年に学校が嵐で倒れ更に明治39年の日露戦争戦勝祝賀の際の煙火で焼けてからは、共同墓地となっています。

庚申塔は、庚申塚(こうしんづか)ともいい、中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔です。

庚申講を3年間に18回続けた記念に建立されることが多く、塚の上に石塔を建てることから庚申塚、塔の建立に際して供養を伴ったことから庚申供養塔とも呼ばれています。

「庚申講の庚申待ち」とは、人間の体内にいるという三尸虫(さんしちゅう)という虫が寝ている間に天帝にその人間の悪事を報告しに行き命を縮めるのを防

ぐため、庚申の日に夜通し眠らないで天帝や猿田彦や青面金剛を祀って宴会などをする風習でした。

現在も続けられている講があり、赤く塗られた庚申塔は講が存続し活動中の証とされています。

庚申塔の石形や彫られる神像や文字などはさまざまですが、申は干支で猿に例えられるため「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿を彫り、村の名前や庚申講員の氏名を記したものが多いようです。

同様の理由で庚申の祭神が神道では猿田彦神とされ、猿田彦神が彫られることもあります。

又、猿田彦神は道祖神とも信仰されるため、庚申信仰が道祖神信仰とも結びつくこととなりました。

更に仏教では、庚申の本尊は青面金剛、日蓮宗は帝釈天とされるため、青面金剛が彫られることが多くあり、庚申塔は街道沿いに置かれるところもある為に、塔に道標を彫り付けられたものが多くあります。これは道祖神など他の路傍の石仏にはあまりみられない機能であり、庚申塔の特色とされています。

我孫子駅前には、国鉄時代の大きな鉄道庚申塔が残されています。昔は殉職祭が行われていました。

庚申塔は全国的な分布が確認されているのですが、特に旧相模国には日本ではじめて三猿が彫られた庚申塔があり、茅ヶ崎市輪光寺(市重要文化財)に、青面金剛が彫られた日本最古の庚申塔などが残っています。

庚申信仰は京都の大黒山金剛寺の八坂庚申堂が発祥の地として、テレビ等で度々紹介されるようになりまし

## 第十八番、弥陀堂(阿弥陀堂)、小文間新田公会堂

移し寺、徳島県母養山恩山寺(ぼようさんおんざんじ)

ご本尊、阿弥陀如来

御詠歌、子をうめるその父母の恩山寺

訪らひがたきことはあらじな

境内後方の相馬二万石の新田集会場と消防ポンプ小屋や火の見櫓があり、入口に弥陀堂と大師堂があります。

畑中の高台から筑波山が望め、眼下には伊奈半十郎忠治が残した「相馬二万石」の美田の一部を一望できます。

小文間は養蚕が盛んで栄えていたのだが、絹の生産の減少により、今では部落全体百戸に幼児は2人きりと人口も減少し、部落下の新田もそのうち葦原になるだろう。

と話され、少子高齢化が進む日本の将来を暗示しているようでした。

弥陀堂は、僧のいない寺のようなもので、最近までここで葬式をしていたそうです。

第19番の大師碑があるのですが、小文間字仲谷津の山口善左衛門による四国四遍大願成就で建立した個人のものだそうです。

なぜ第十九番阿波立江寺の写しなのか、不明です。

## 第十六番、西光院観音堂(廃寺)、白山神社境内

ご本尊、十一面観世音菩薩(東谷寺に現存)。

移し寺、徳島県光耀山観音寺

御詠歌、忘れずもみちびき給え観音寺

西方世界弥陀の浄土へ

## 白山神社境内の様子

札所堂の後に閻魔大王と赤鬼婆あの木像が祀られた小堂がありました。令和元年倒木で堂倒壊。

東谷寺住職により「魂抜き」を行ったそうです。

以前は山の中の参道脇にあったようで、赤鬼婆あは三途の川を渡る時の脱衣婆あでした。

冥土にきた死人から取った衣服をかける所で死後の世で最初に対面する相手と言われますが、ここ戸田井の脱衣婆あは、昔、一家を滅ぼすという伝説を残していました。

それは、雨が降るある夜、一人の男が赤鬼婆の祀られた堂に、雨宿りで立入った事から始まります。

昔は「赤鬼婆の姿を目にすると災いが身にかかる」と言われていましたが、この男はこの話しを知りつつも、赤鬼婆を拝みたいと湧上がる気持ちを押しさえきれずに覗き見てしまいました。

しかし、赤鬼婆の形相に驚き、肝を潰してしまい、男の家は子孫も残せず火災をともし崩壊したとの伝説が伝えられています。

地蔵菩薩は閻魔大王の本地仏であり、閻魔大王の姿で人の現世での生命が尽きた日から、三十五日目までに六道のどこに進むかの判定を下し、はじめをつけられた後で、地蔵菩薩の姿に戻られ、救済の側にまわって下さると言う菩薩とされています。

令和元年、白山社境内の神木の枝が折れて焰魔堂は倒壊してしまい、閻魔大王と脱衣婆も損傷のため御姿をお隠しになられたそうです。



## 第六十四番 戸田井白山神社境内。

ご本尊、阿弥陀如来(東谷寺に現存)。  
移し寺、愛媛県石鉄山前神寺

(いしづちさんまえがみじ、鉄は鎚と同読み)

御詠歌、前は神、後は仏極楽の

よるずの罪をくだくいしづち

ご詠歌の意味。前神寺の御本尊は阿弥陀如来です。  
「前は神、後は佛」から前神寺、後の佛とは、前神寺が石鉄山の別当で石鉄山金剛藏大権現の本地佛は阿弥陀如来ですから、前は神、後は佛と云うたのです。

阿弥陀如来は極楽の教主なので、其の下に極楽と書いたのです。

石槌は物を砕く道具ですが、此の石槌で罪科を打ち砕くと詠み結んであります。

戸田井の西光院跡(廢寺)と撤去された観音堂。

第64番大師堂は、16番観音堂と別の敷地にあり、阿弥陀如来と観世音菩薩は観音堂にありました。

参道向かい側の戸田井会馆は元西光院の跡です。

明治4年の神仏分離令により白山社は、西光院より独立しました。又明治6年、ここに小文間小学校が開校されました。

西光院由来の碑。

『東谷寺末。享保七年(1722)東谷寺開山第一世祐賢の室永信により中村家一族の菩提寺として開山、水白山西光院と号し白山神社を鎮守とされた。

相馬なる文卷川の辺りに山簗(そび)え水清く万代も動きなき岩根(いわね)こりしき千世(千年)も葉かえめ松杉森々麓(ふもと)に立せるべき故に水白山と

号したり」とあります。

更に「本尊阿弥陀如来と観世音菩薩を東谷寺に移し、この地には尊像および大師堂二棟を建立」東谷寺第59代流派開山二十世西光院現住、秀成謹んで申す」と結んでおります。

後藤縫殿之助の彫刻 白山神社正面の参道から石の階段を上り詰めたところに伊邪那岐命(いざなぎのみこと)を祀った拝殿があり、奥殿には後藤縫殿之助の白山縁起を題材にした彫刻があります。

彫刻師後藤縫之助は岩井の伊藤家の生まれで、笠間の宮大工後藤家に修行に出て婿となりました。

明治10年(1877)の万国博覧会で作品の高麗獅子を発表展示し、時の総理大臣大久保利通より「殿」名を押し後藤縫殿之助と名のるようになりました。

嫡男の後藤桂林と房州鴨川の「波の伊八」四代目初代「波の伊八」の欄間彫刻「波」は葛飾北斎の浪裏の富士を思わせる透かし彫りで有名です。

後に、彫刻の寺として有名となった柴又帝釈天の神殿の彫刻の造営に取り組み「彫刻の寺」として名を残しました。

既に笠間稲荷の彫刻は、後藤縫殿之助の作であり、息子桂林が残した取手の八坂神社の神殿も取手市指定文化財になっています。

後藤縫之助が若年の頃、相馬霊場参りで伊勢屋に泊まった時に村長に逢い、懇望されて白山社の本殿の彫刻を制作しました、若い時の作品です。

相馬霊場のうちでも、この辺りには常磐線開通後八十八ヶ所巡りで東京講が大勢来ていたようで、白山神社の石柱の一つに歌舞伎役者の坂東三津五郎

(何代目か不明)の名前が窺えます。取手市史民俗編より。

境内の第16番札所は観音堂の観世音菩薩立像、第64番札所は阿弥陀如来立像の横に、それぞれ建立されています。

白山神社本殿の胴羽目板絵は、背面が「八俣のオロチ退治」、右壁「天狗と牛若丸」、左壁「菊慈童と玉依姫」が彫刻されています。

菊慈童の伝説

中国の南陽郡酈県(れっけん)山という山より薬の水が流れ出ていると言う噂を聞いた魏(ぎ)の文帝。

中国の三国時代、呉(ご)、蜀(しよ)、蜀漢、早速臣下にその水上を見て参れと山に使わす。

やがて勅使が山に着くと、庵の中からも異様な童子(少年)が現れる。

勅使が問うと童子は、自分は周の穆王(ぼくおう)に使われた童子だと名乗る。

周というと七百年も昔の話。そんな人間が今まで生きているはずがないと勅使は怪しむ。

すると童子は、昔、穆王より二句の偈(げ、法華經の句)を書いた枕を賜ったと、その枕を見せる。

その二句の偈の経文を菊の葉に書いておくと、その葉より滴る露は不老不死の薬となるので今まで生きてこられたと話す。

そして童子は樂を奏し、菊水の流れを汲んでは勧め、自らも飲む。

そして枕を戴きあげ、いつしか菊の枕に酔い伏す。更に、七百歳の寿命を君に捧げ、菊をかき分け山の仙家に帰って行きます。慈童↓菊水。

菊の露を飲み不老不死の仙童となったという。能の一つで四番目物。前記の伝説を脚色したものと。観世流以外では「枕慈童」。

能は五番立という初番目物の脇能物、二番目物の修羅物、三番目物の鬘物(かざらもの)、四番目物の雑能物(ざつもの)、五番目物の切能物からなる演目に順序が定められています。

玉依姫(たまよりひめ)については、葺不合神社、相馬霊場 77 番(ご案内しますが、神武天皇の母君です。

鶉萱草葺不合命(うがやふきあえずのみこと)が父君で山彦の子であり、葺不合の母は玉依姫の姉君で豊玉姫命になります。

#### 四国の移し前神寺について

前神寺は天狗岳山頂にある石鉄権現の別当寺で、明治の神仏分離で現在地に移り、慶長年間に建てられました。山頂近くの成就には前神寺の出張所があり、ここを奥前神寺といい、麓の本寺を里前神寺といえます。

毎年七月一日から十日間が「お山開き」で、里前神寺より黒瀬峠を越え成就から石鎚山頂へ、白衣姿の信者が仏名を称(とな)えながら登ります。

#### 打止

#### 日立市にもある小貝川、小貝川の歴史は蚕飼川

小貝川の川岸には聖徳太子の時代から、養蚕の桑の木が多くありました。

倭(奈良)の時代、常陸国鹿島は海路で奈良の都と結ばれた、関八州や蝦夷では最も古い津でした。

【注記】関八州＝関東地域、蝦夷＝東北海道地域

欽明天皇御代(AC538-571)の時代、

#### 金色姫(こんじきひめ)伝説

延長4年(AC926)、筑波国造権太夫良平の創祀。

天竺(てんじく)の霖夷(りんい)大王と光契(こうけい)夫人との娘、金色姫の神話です。

金色姫は後添である後妻に殺されそうになり、大王は桑で作った鞆(うつぼ)船に姫を乗せ海に逃がしました。

お椀二つを合わせた様な船は仲国(なかくに)鹿嶋灘東部の豊浦湊に漂着し地元漁師の権太夫夫婦が金色姫を救い面倒を見ました。

やがて姫は病で亡くなり桑の棺に葬られますが、姫は蚕(かいこ)と化し繭(まゆ)となります。

そして夫婦は、筑波山の「影道(ほんどう)仙人」別名「蚕影道仙人」に繭から絹糸を紡ぐ技術を教わり、さらに、筑波に飛来された欽明天皇の皇女各谷姫(かぐやひめ)に神衣を織る機織の技術を教わります。

之が日本における養蚕と機織の始まりです。

崇神(すじん)天皇御代の頃、4世紀前、蚕影山大権現として創祀、別当に桑山寺建立。

#### 三社ある金色姫の杜

茨城県には此処の他に、豊浦と名の付く二ヶ所の神社が共にこの金色姫伝説の杜としています。

- これらは常陸国の三蚕神社と呼ばれています。
- 一、蚕影山神社、こかげさん…つくば市神郡 1998、
  - 二、蚕養神社、さんよう …日立市川尻町 2377-1
  - 三、蚕霊神社、さんれい …神栖市日川

#### 日本最初の蚕養神社

所在地、日立市川尻の国道6号十五川河口に建立  
御祭神、稚産霊命(わくむすびのみこと)

御子神、火の神の軻遇突智神(かぐつちのかみ)と土の神の埴山姫(はにやまひめ)の子、

宇気母智命(うけもちのみこと)の御体から蚕が生まれたという神話があります。

この神社には、その御神命の稚産霊命、宇気母智、事代主命(ことしろぬしのみこと)の三柱を祀る。

また、豊浦浜を「豊浦の水門」ともいわれ、尊神の現われた処を蚕養浜と云い、鶉の岬寄側には小貝浜海水浴場があります。

#### 小貝ヶ浜と小貝川、

小貝川河口には10台程の駐車場とトイレ、水道型のアーチ橋「こがい橋」があります。

海食洞窟のある海岸には二ツ島が見え、太平洋の波と松の木が海の静寂の景色を見せてくれます。

取手の小貝川河口とは、また一味違う小貝川です。

国民宿舎で人気がある「鶉の岬」が隣接している小貝ヶ浜海水浴場は、海鶉の生息地で、鶉の狩場が設置されています。駐車場に案内板が設置されているのでご利用下さい。

#### 幻の蚕生貝(さんしょうがい)

悪を除き穢れをはらい、鼠を避ける蚕生貝。

蚕養浜だけに出る神様の御心をくむ蚕生貝は、悪を除き穢れをはらい鼠を避けるといふ伝えられ、養蚕者はこれを蚕棚に飾ると、蚕にくせが入る事がないとして珍重していました。 社務所案内板